近藤 今日はお招きいただきありがとうございます。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の近藤と申します。こちらは浅井です。

浅井 浅井です。

近藤 『アジア・アフリカ言語文化研究』は、私が所属しているアジア・アフリカ言語文化研究所（東京外国語大学の附置研究所）の雑誌で、1968年に創刊し、年2回発行しております。B5判で和文が2段組、英文が1段組となっております。

研究所の出している雑誌ですので、研究所の説明を本当に簡単にしますと、本研究所は人文社会系唯一の、むしろ最初の、と言ったほうがいいでしょうか、最初の全国共同利用研究所として創立し、現在、所員は36名、主に言語学、歴史学、人類学の専門家で、アジアとアフリカに関する研究をしています。京大の人文研より若干規模が小さくなっています。

紀要という言葉にわれわれは若干抵抗がありまして、一度、この雑誌を紀要と大学の図書館の担当者が呼んだことがありました。そうしたら、教授会が紛糾し、所員がいきり立って、紀要ではないと騒いだという事件もあったぐらいです。京都大学のような立派な大学だと紀要はちゃんとなっていると思いますが、うちの大学の場合、紀要と呼ばれるものは、査読なしで自由に書かれた文章が載るものですから、なるべく紀要とは言わないようにしています。

先ほどの『科学コミュニケーション』同様、投稿に資格や会費は要りません。その点では学会誌だと会費が必要ですので、オーバードクターとか、大学院生にはフレンドリーな雑誌となっています。

一応査読があり、外部にも依頼し、謝金を払っています。それはそうでないととてもやっていけないところがあります。恐ろしいのは執筆枚数制限がないというところでして、あるとき500枚の原稿が届いて（笑）、読むだけで大変だったということがあります。現在、制限を設けるかどうか検討中です。

言語は日本語、英語、フランス語で投稿することができます。また、資料という分野があり、ここでは、解説文というか、地の文は日本語か英語かフランス語でないといけないのですが、そこに出てくるテキストとしてはアラビア語やチベット語など何語でもいいということになっています。要旨は英文です。

どういう雑誌か見ていただくために次号（3月）をお見せしますと、台湾、インドネシア、イラン、ネパールに関するもの、あと、言語学では契丹語に関する論文などが掲載されています。表紙は次号よりこんな感じに変わります。印刷は京都の中西印刷さんにお願いしています。

人文研と同じように、所員が書かないという大きな問題があります。一応3年に一度は必ず書かないといけないという内規があったはずですが、もはや皆さん忘れていまして、入所以来20年以上1本も書いたことがないという方もおりまして、ほぼ無実化しています。そういう意味では、ですからかなり、逆の意味で言えば開けた雑誌ということになります。

投稿は論文が主であって、言語は日本語が主であるということはよろしいかと思います。これは国際化問題というのがありまして、あるとき、法人化したときかな、一応、東南アジア研究所のように和文誌、英文誌に分けてやろうという検討もされたのですが、そうすると英文誌の方が非常に薄くなってしまうということが判明し、結局それはあきらめました。ただし、あとで述べますように、海外からはそれなりに投稿があります。

編集体制としては、共同研究拠点ということで、学外の委員が6名います。ただ、これは専門委員ですので、年に1回、2回来ていただいて、大方針を決定するのに加わっていただいています。実質、所内の担当教員6名と併せ12名です。所内の担当は6名で、これは一応2年ごとに交代ということになっていますが、引き続きやる場合も多く、私も3期ぐらいやっています。

編集事務は今、浅井さんにやっていただいています。研究所の性格上、所外の意見を反映させなければならず、それはやっていますが、ただ逆に言うと、法人化前は割と事務の人はたくさんいたので、正規の事務職員にやっていただけたのですが、最近は事務職員も激減していますので、われわれで今は非常勤のかたちでお願いしないといけないという、そこはかなり苦しいところです。

査読体制は完全ブラインドで2名の査読者を立てます、割れたときには3人目を頼むこともあります。困るのは雑誌の扱う分野が非常に多岐にわたるということで、編集委員で顔を突き合わせてもなかなか査読者を見つけられず、そういうときはほかの所員に頼んだり、いろいろな方に頼んで査読者を見つけます。これが一苦労ですね。

また、本誌は、イメージとしては結構学会誌に近いのですが、ただ、学会の場合、会員は学会に入っている以上、学会誌の査読ぐらいするかなと思いますが、こちらは完全オープンですので、要するに査読者は、本来、査読依頼に応じる義務はないわけです。したがって、断られることもよくありまして、そういうのが困ります。それが査読の遅れということにつながって、いろいろな問題を引き起こすということがあります。

投稿数について一応データを取ってみたのですが、4年分ですが、もう投稿数の総数がそもそも少ないときは非常に少なかったりしますし、油断するとすぐ減ってしまいます。ですから、常に投稿を集めるためには努力が必要であるということと、あと歩留まりが悪い年があります。例えば、91号は投稿が12本あったのですが、掲載はわずか2本になってしまったと。これはかなり問題で、それ以降どうにかしようということで、努力しているわけですが、油断するとそういうことが起こり得るということです。あと、海外からの投稿は、常にあります。英語の誌名が単純なせいか、特にアフリカから非常にたくさんの投稿が届きますが、なかなか掲載に至らないというところが難しいところです。掲載率27％というのは、まあこんなものでしょうか。

投稿数を確保するのが大変であると、油断していると減るし、努力しないと増えないということと、あと、査読に耐える原稿はどのぐらいあるかというのが、査読雑誌である以上、これがかなり難しいですね。査読者の方々もなかなか厳しいので、よく落とされるということです。

所内的に言うと、アジア・アフリカ言語文化研究所では、例えばプロジェクト単位で雑誌を出したり、出版物を出したりということがあり、そのプロジェクトの関係者はそちらのほうで執筆してしまいます。このように、論文が少ないということがあると、特集号を組んで原稿を確保しなければということで、今それを進めているところです。ですが、特集号も難しさがあり、査読はしなければならないのですが、その際に、特集のうちのいくつかが査読を通らないという事態が起こりえます。かといって査読を甘くすると、査読雑誌としての質が保てないということがあり、それに目をつぶると、普通の「紀要」になってしまうということで恐れているわけです。

もっと根本的な問題としては、最初にインパクトファクターの話がありましたが、研究所にとっては、インパクトファクターがあるような国際的な学術誌にする必要があります。しかし、それをできる予算も人員もいないというのが一番どうしようもない苦しいところです。例えば、近い分野で言うと、東京大学東洋文化研究所がCambridge University Pressからかなりのリソースを使って学術誌を出していますが、われわれにはとてもそんな余裕はないというところです。

それから、もう一つの問題は、東京外国語大学の学内のギャップです。先日東京外国語大学学長が「オープンアクセス宣言」というものを発表されました。あらゆる学内の出版物は発行と同時にリポジトリに載せて、すべてをオープンアクセスできるようにするのだという宣言をしたのです。それは非常に結構なことであって、高い理想を高らかにうたい上げられたのですが、それと同時に、予算の削減にもなるから紙の出版を原則廃止するようにという指示が参りました。つまり、『アジア・アフリカ言語文化研究』も、東京外国語大学の他の部局が刊行している「紀要」同様、Web雑誌にせよ、ということです。皆さんどうお考えになるかわからないですが、われわれは、今のところは、紙のない雑誌というのはステータスが下がる可能性があるのではないかという恐れを持っております。編集専門委員会の先生方にもご相談したのですが、世間にWeb雑誌が普及して、紙の雑誌と同等の評価を受けるようになるまで、とりあえずのところは紙を維持する予定です。ただ、これは、大学の方針に反していますので、そのぶんの予算は大学には請求できず、われわれ自前でやらないといけないということになります。

お金の話はスライドには入れなかったのですが、浅井さんに調べてもらって、1冊出すのに100万円前後のお金がかかっています。それで、ですから年２号出すと200万円ですね。これがもちろんもっといろいろ節約のしようはあると思いますが、それをできる限りは何とか続けていきたいと考えます。この雑誌は、研究所の顔ですので、それが図書館に並んでいることに意義があると考えています。現在、予算の大幅な削減を受けて研究所の事業を見直しつつあるのですが、研究所としては、これをやめるという選択肢は有りません。言い方をかえれば、雑誌の運命は、結局のところ、研究所の運命と一体なわけです。今や、すぐに組織改編が求められるなかで、研究所自体の意義や存続が常に問われる状況にあります。そういった状況において、研究所を守ると同時に、質の高い学術誌を発行しつづけることが、社会に対する我々の責務だと考えております。ご清聴ありがとうございました。